

詩歌・小説の中のはきもの (第27回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

260 食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。イエスは答えて「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる。」と言われた。 新約聖書

★『ヨハネによる福音書 新共同訳』から。日本にも、宿に着くと足を洗うという習慣があった。草鞋やサンダルは足が汚れるのである。最後の晩餐でイエスは弟子たちに向かって、相互の「愛と謙遜の証」として互いの足を洗うことを命じた。この命じたことを守り、一三世紀以降イングランド国王に始まって、現在のエリザベス女王まで「洗足式」(Royal Maundy)が続いている。貧しい人の足を洗うだけでなく、食物や衣服、金銭を贈る行事になっている。

261 靴は人間を寒さから守ったように、不運や災難からも人間を守ると考えられていました。嵐や雹も特定の型の靴を投げれば追い払うことができると信じられていましたし、夜の悪霊を部屋に侵入させないために、ベッドに入る前に靴のつま先は必ず戸口に向けて不在をよそおわなければならない、ともいわれていました。今でも小さな靴をお守りにしている人をしばしばみうけます。 阿部謹也

★『中世の窓から』の「靴職人の世界」から。

イギリスの土産物屋に小さな陶製や金属製の靴がたくさん売られていた。注意して見ているとハンドバッグや腰に靴のオモチャを付けている人がいる。彼らの話す言葉を聴いているとドイツ語だったり、北欧の言葉らしかったので、私は旅のお守りだろうと見当をつけていた。モロッコの土産物屋の小母さんに、これは何?と訊いたら、「クツ、ムヨケ」と言ったが、まさか「オマケ」ではあるまい、「マヨケ」と言ったのだと思う。

262 履き物のつま先を必要以上に長くするのは、古代エジプトやオリエントにもすでに見られる。…つま先はますます長くなり、履く人の気品の度をシュナーベルシュー(くちばし靴)のつま先の長さで測り始めるほどになった。男爵は足の倍の長さのものをもってよかったが、普通の人にはどんな金持ちでも足の長さのものに限られた。

マックス・フォン・ベン

★『モードの生活文化史 (永野藤夫他訳)』から。ノコギリサメのように尖がった爪先、それでも足りなくて先端を膝に届くまで曲げて鎖で留める。まるで悪魔が履いているような靴が流行した。一四二二年、フランス王シャルル六世はこの靴の着用を禁止したが、実際にこのモードが消えたのは十五世紀末だったという。モードというのは集団を錯誤させる悪魔的要素を潜めているのが不気味でもあり面白くもある。

263 帝劇の開館をひかえての乗り込みではあり、この夜は特にはなやかな出迎えであった。一等車を降り立つ成駒屋は、

山高帽に羽織袴、まさに明治初年の「官員さん」そのままのいでたちだったという。

しかし、これは当時一般の正装と云ってよく、東京乗り込みの気組みを見せたものとして、むしろその態度を買うべきだったかも知れない。成駒屋は、新しく出来た帝劇が、すべて西洋風の建築と聞いて用意したのか、袴の下を見ると黒の短靴を履いていた。 永井 龍男

★『石版東京図絵』から。昭和六年（一九三一）の不況下、東京靴同業組合は芸者に西陣織で造った婦人靴を履かせて「和服に洋靴ええじゃないか」というキャンペーンを行っている。苦し紛れの奇策という感じがなきにしもあらずだが、袴に靴は今考えるほどチグハグな取り合わせではなかったのである。この本には靴材料の櫛原商店社長だった櫛原周一郎の自伝『ある生涯』も引用されている。櫛原さんは達意の文章を書いた人である。

264 五足の靴が五個の人間を運んで東京を出た。五個の人間は皆ふわふわとして落着かぬ仲間だ。彼等は面の皮も厚く無い、大膽でも無い。而も彼等をして少しく重味あり大量あるが如くに見せしむるものは、その厚皮な、形の大きい五足の靴の御蔭だ。

興謝野鐵幹・木下杢太郎・北原由秋・平野萬里・吉井勇

★『五足の靴』から。明治四十年に前記の五人で九州を旅行した。この旅行は文壇に南蛮趣味をもたらした文学史的に意義深いものであったという。「五足の靴は驚いた。東京を出て汽車に乗せられ、汽船に乗せられ、唯僅に領巾振山で土の香を嗅いだのみで、今日まで日を暮らしたのであった」などと「靴」が主語になる文章は目新しいものだったろう。その上これは確実に格調も高いものであった。

265 「最近、なかなかそういういい靴には巡り合えてないねえ。きりっとしてて、媚びたところがなくて、意志の強そうな靴だ。それより何より、あなたの足によ

く合っている。まるで、生まれた時から足についているみたいに見えるよ」

小川洋子

★『薬指の標本』から。ちょっと衒いがあるような感じもするが、ある靴を見せられてこれだけの見立てが出来たら大したものである。一体何者であるか。五十年靴磨きをしている人だという。この人、一目で材質、価格、いつごろどこのメーカーが造ったものかが分かってと豪語している。そんな知識の土台があって初めて口にできるせりふなのだろう。五十年に一度お目にかかれるかどうか、そんなヒール五センチの黒いリボンのついた黒の革靴を彼女に贈ったのは、標本係の上司だった。

266 六十歳のわが靴先にしろがねの霜柱散る凜々として散る

白秋は五十七歳をもって世を去ったのであるから、すでに先師より三年長く生きていた勘定になる。そんなこともいろいろ思いだしたりしながら、せめてあと十年身もこころも勇猛なれという、自励祈念の思いを託したのが、この歌なのである。 木俣 修

★『わが歌の秘密』から。北原白秋は歌人でも詩人でもあった。一首の中心は霜柱にあるが、定年退職したあとは、大抵の人は革靴と疎遠になる。そのことをわが身に照らして思い知った今は、作者は靴に先陣を担わせ、ハナを持たせたのではないかとも思える。そうではなくて、「オイ、戦友、あと十年頑張ってくれよ」と靴に気合を入れたのかも知れない。

267 西郷との談判で、双方五人ずつの委員を選び、城受渡の式をすることにした。…その時は殺気全都に充満すといふ形勢で、なかなか油断が出来なかった。それで城受渡にくる官軍の委員らも非常の警戒で、堂々たる官軍の全権委員の一人が、狼狽のあまり片足に草履をうがちなが、玄関を昇ったといふ奇談ものこつてあるくらゐである。 勝 海舟

★『氷川清話』から。江戸城明け渡しのと
きの話である。このときの引き取り式が終
わったのも気付かず西郷隆盛は居眠りをし
ていたが、起こされると寝とぼけた顔を撫
でながら悠然と帰っていったと海舟は舌を
巻いている。中国に、「屐齒の折るるを覚
えず」という言葉がある。晋の謝安が碁を
打っているときに、家来から前秦に勝利し
た報せをゆったりと受け、客の帰ったあと、
一転して躍りあがって喜び、下駄の齒の折
れたのにも気付かなかったという逸話であ
る。西郷さんは自陣に戻ってからどんな風
に振舞ったのだろう。

268 おつとめが終わると急にまた昨夜の
住職が説明口調にかえて、僧賢心が
捨ったという行叡居士の木靴をみせてく
れた。ちゃんと金襴の袱紗に包まれた舟
底のように朽ちた木靴なのである。

眞下 五一

★『京都物語』の「木靴」から。清水寺の
奥の院・音羽山法厳寺のそもそもは、賢心
の夢に現われた観世音菩薩が東に向かって
旅をせよと告げられのに従い、金色の川
の流れをたどって、登り詰めた山中で行叡居
士に会う。法書を与えられた途端、居士の
姿は消え、あとを慕うと山路に居士の木靴
が落ちていたのを拾い、これは自分にこの
山を託されたのだと悟って建立を發願した
ものだという。木靴一つをもって寺をつく
る契機にした賢心、豪気なものだ。

269 「足の裏ということばは、今ではお
寺のごく内輪でしか使われてないみたい
ですけど……も、もともとは、初詣でな
んかでお寺が混みあった時、ひとが遠く
から投げたお賽銭が箱まで届かないで地
面に落ちると、そばにいた人がそれを足
の裏で押さえて、それからそっと拾って
自分のものにしてしまうということの意
味だったそうです……」

「毎年新聞に、今年の初詣では何万人
で、お賽銭の合計がいくらだったとか報
道されてますけど、実はお寺のほうで
は、あらかじめ予算ができていて、それ
も実際より少なめに見積もって、今度は
この額でいこうと決めてしまっているん

です。そして正月がすんだあとでは、予
算の額だけをお寺の収入として預金し、
余分のお金は幹部が山分けするんです。
お祭りの時も同じらしいです。もう長年
の慣例みたいなもので、それをひそかに
足の裏と呼んでいるんですわ」

夏樹 静子

★『足の裏』から。「足がつく」、「足が出る」、
「足を出す」、「足が乱れる」、「足を抜く」、
「足を引っ張る」、どうも足にまつわる言葉
には感じの悪いものが多い。この隠語を
知ったとき、足は、なにゆえ、これほどま
でに働きづめに働いているにもかかわらず、裏側まで特定されて悪い意味に使われ
るのかと、足に同情した。石川啄木は「は
たらけどはたらけど」と言って自分の手を
じっと見たが、私は自分の足をしばらくの
間じっと見つめ、考え込んでしまった。